

メタボリズムに内在する未来観と現代に遺したもの The future view and heritage of metabolism

本宮久隆¹, ○朝倉亮¹, 山中新太郎²
Hongu hisataka¹, *Asakura Ryo¹, Yamanaka Shintaro²

1. 研究背景

高度経済成長期に対して経済状況の正負が反転した現在、社会変化に対応できるメタボリズム建築の手法や思想を再考し、それらを現代に当てはめて検証することは、今後社会予測が難しくなる時代において、意味の有る事となると考えている。

2. 研究目的

当時と同じ様に社会が劇的に変化しようとしている現在において、当時のメタボリズムを振り返り、彼らがどのような未来像を描こうとし、その結果何が現代に遺っているのかを検証する。

3. 研究方法及び研究対象

研究対象は 1960 年に行われた世界デザイン会議におけるメタボリストの内、建築家として作品を遺した菊竹清訓・黒川紀章・大高正人・槇文彦の作品とそれぞれの言説とする。本研究におけるメタボリズムの定義は「建築設計において複数の未来像を想定し、生物学的思想を元に、建築計画・建築機能に多様性をもたせた建築」とする。それらと、メタボリズムが提唱された当時の社会状況を加味した上で、彼らがどのような手法を用いて社会に適応していこうとしていたのかを分析する。また、それらの未来予測、適応手法は現代の社会状況に当てはめて見る事は可能か、根付いている要素があるのかを検証する。

・分析項目

- 1) 変化・更新していく最小単位
- 2) 最小単位が変化してゆく期間
- 3) メタボリズムが起こりうる範囲・外枠
- 4) メタボリズムが起こりうるスケール
- 5) 何をもちてメタボリズムとしているのか

菊竹清訓	黒川紀章	大高正人
1958 スカイハウス	1960 農村都市計画	1960 新宿副都心計画
1958 海上都市	1961 ヘリックス計画	1961 花泉農協会館
1958 塔状都市	1962 箱型量産アパート	1962 新居浜農業協同組合会館
1963 出雲大社庁の舎	1964 日東食品山形工場	1964 坂出人工土地
1964 浅川テラスハウス	1967 山形ハワイドリームランド	1967 千葉県立中央図書館
1965 東光園	1969 小田急イン乙女	1969 南郷農協会館
1966 都城市民会館	1970 タカラビューティリオン	1970 静岡市農協センター
1967 パシフィックホテル茅ヶ崎	1970 東芝IH館	1970 自動車労働研修センター
1968 島根県立図書館	1970 空中テーマ館	1970 栃木県議会棟庁舎
1969 久留米市民会館	1971 佐倉市庁舎	1971 基町高層アパート
1969 萩市民会館	1972 中銀カプセルタワービル	槇文彦
1969 万博ランドマークタワー	1972 中銀宇佐美カプセルビレッジ	1967 ゴルジ体計画
1969 箱根国際会議場	1972 森泉モデルハウスK	1969 ヒルサイドテラス
1969 ベル・低所得者層住居	1974 コイトビル	菊竹清訓 計16作品
1972 層構造モジュール	1975 コンクリートモデューラーハウス	黒川紀章 計17作品
1975 アクアポリス	1976 ソニータワー	大高正人 計10作品
	1978 国立民族学博物館	槇文彦 計2作品

Tab.1 対象作品

4. メタボリズムの時代

メタボリズムが活躍した時代は、日本では高度経済成長の真只中であり、不可能と思われていた事が次々と実現されていった当時、多くの分野で未来を予測することは頻繁に行われていた。このような時代に建築界からも、丹下健三による「東京計画 1960」に代表されるような様々な未来都市の提案がなされた。メタボリズムグループの提案も都市から始まる。



Fig.1 「海に浮かぶ新東京」



Fig.2 塔状都市(菊竹)

5. メタボリズム

菊竹・黒川・大高・槇の4人のメタボリズム作品や言説についての検証を行った。4人のメタボリストは、それぞれの解釈を持ちながらも、建築や未来を固定的なものとして見るのではなく、変化するものとして見ていた。それは未来を計画するという建築家としての主体性を放棄しているとも言える。菊竹による木造家屋手法の流用や、黒川の仏教的な思想から発するこれらのメタボリズムは、未来学が流行した時代にあっても固定された明確な未来のヴィジョンというものは持たず、日本建築に見られるような移り変わっていくことの重要性を見ていた。

菊竹のメタボリズム作品は“変わり得るもの”と“変わり得ないもの”といったもので定義される。建物が“仮設的”、すなわち物理的・社会的耐用年数が短いということは、より新しい手法や技術・素材をその建築に取り込むという事であり、それはすなわち建築の“成長”であるとした。

<都市に展開してゆくメタボリズム>

世界デザイン会議が行われた 1960 年前後には都市に展開し、代謝・成長する都市像の提案がなされた。1970年代には層構造モジュール(Fig.3 右)などにより実作され、実際の都市への展開は目前であり、建築という部分が都市という全体となる可能性を示した。

<ムーブネットによるメタボリズム>

初期の作品であるスカイハウス(Fig.4 左)に代表される様なムーブネットによって将来の変化の可能性を



Fig. 3 菊竹による都市に展開してゆくメタボリズム



Fig. 4 菊竹によるムーブメントを用いたメタボリズム



Fig. 5 菊竹による上下構造を分離したメタボリズム

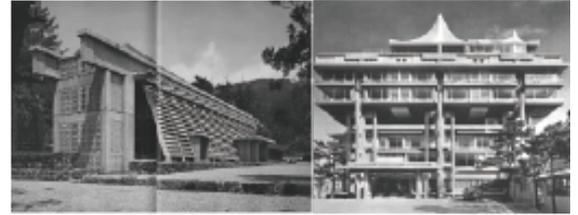


Fig. 6 菊竹による主構造を分離したメタボリズム

担保する提案がなされた。建築の長寿命化がなされたとも言えるが、建築の使い方を計画するという建築家が持つべき主体性を放棄したとも言える。

<上下構造を分離したメタボリズム>

物理的耐用年数に着目し、都城市民会館(Fig.5 右)などの公共建築で示された、意図的に上下構造で耐用年数に差異を持たせた提案。利用者のためとは言いつつも、将来の使われ方の予測を放棄している。

<主構造を分離したメタボリズム>

社会的耐用年数に着目し、用途によって変化する可能性のある居室と、変わり得ない構造を意図的に分離した提案。東光園(Fig.6 右)などに代表される。

6. メタボリズムが遺したもの

6-1 建築の非永遠性

永遠性に美を求めていた西欧とは異なり、変わりゆくものに美を求めていた日本において、物理的耐用年数を長くすることが建築や社会にとって有益なのだろうか。メタボリズムは社会の多様化に対応して、社会的耐用年数の延長をカプセル化等によって担保し、物理的耐用年数を意図的に短縮することによってそれらの一致を図り、近代化によって離れてしまった建築と人の距離を縮めようとしていた。

6-2 部分から全体へ

メタボリストたちは部分から全体を構成することで、時間の経過による社会状況の変化に対応した建築や都市を考えていた。人間を中心とした生活空間や都市に重点を置き、生活の多様化に伴って、建築も多様化するシステムを構築した。最小単位の規定や群造形理論等によってそれらは実現され、それらはトップダウン方式の都市計画への反発として現れていった。

6-3 建築家の主体性

建築家が使用者の全てを規定するのではなく使用者によって建築が成長していく。メタボリストがそれぞれの思想を持ちながらも、メタボリズム運動の

特徴でもある議論によってそれらは示され、未来の利用者に主体性があるといった点では共通していたとも言える。

7. 総括

メタボリストたちは何十年先といった明確な未来を想定するのではなく、変化しうる社会に対応するために、当時の社会問題に対する意識や経験をふまえ、提案していた。彼らは建築として、より工業化を促進し、建設技術や構造を発展させるのではなく、多様な人間の生活空間を創造する生物学的な発展を目指していた。未来を見るだけでなく、仏教や日本の伝統的建築にみられる過去の思想を用いていたからこそ、現代にも通じる視点が多くある。建築とは、竣工が完成なのではなく、社会の変化に同調し、時間と共に”メタボリズム”していくものだとこのことを、今改めて認識する必要がある。

ただ保存され、人が入って活動することのない国宝建築がただの美術品になってしまっているように、純粋な”建築の保存”では建築を生かす事にはならない。変化することやめた建築は”死”を迎えるが、真のメタボリズムにとっては”転生”であり、解体も”死”ではない。たとえ解体されたとしても、それによって新たな議論を呼び、新たな思想や手法が生まれることによって、メタボリズム建築は”転生”する。

参考文献

- [1] 大高正人・川添登「メタボリズムとメタボリストたち」,株式会社美術出版社,2005
- [2] 八束はじめ「メタボリズム・ネクサス」,株式会社オーム社,2011
- [3] 黒川紀章「黒川紀章ノート」,同文書院,1994
- [4] 「菊竹清訓作品集 1」,株式会社求龍堂,1990
- [5] 「菊竹清訓作品集 2」,株式会社求龍堂,1990
- [6] 「菊竹清訓作品集 3」,株式会社求龍堂,1992
- [7] 「菊竹清訓作品集 4」,株式会社求龍堂,1998
- [8] 堀江あき子「昭和少年 SF 大図鑑」,河出書房新社,2009
- [9] 科学技術庁監修「21世紀への階段」,弘文堂,1961